

「イエス・キリストのMastery for Service」

木ノ脇 悦 郎

皆さんは、入学式以来関西学院のスクールモットーであるMastery for Serviceという言葉をくり返し聞きながら過していることと思います。入学式のシーズンは、キリスト教の暦ではイエス・キリストが十字架にかかった受難週から、復活という出来事を想起するイースターにかけての時期と重なってきます。

Mastery for Service即ち「奉仕のための練達」をその源流にまでさかのぼっていきますと、実はこのイエス・キリストの受難と復活ということに出会うのです。「奉仕」とは、自分だけのためではなく他者のために働き仕えることだといえます。そして、よく仕えるために私達は自分に与えられた賜物、能力を更によいものへと高め「練達」していくというのです。イエスという人物は、あのローマの支配下にあったユダヤ社会という閉塞的な状況の中で、人々の希望となりました。その希望とは、人間が人間として生きるための人間性回復の希望であったと言ってもよいかと思います。当時の人々が人間として生きるために、イエスはその生命をかけて人々に仕えたのでしょう。その結果が権力を持つ者達による残酷な十字架刑であったのです。そこまで徹底的に「奉仕」に生きたこととなります。

しかし、その奉仕のための死はそれで終わりませんでした。その死の後に「キリスト」（救い主）として人々の中に生き続けることになったことは御存知のとおりです。それは、彼の人の死後2000年経った今も、世界中の人々に励ましと慰めを与え、多くの人々に困難な中で希望を与え続けているということです。今日の時代の中で、私達がこの希望を受け継ぎ、次の世代の人々にもそれを伝えていくことこそMastery for Serviceの根源的な意味ではないかと思うのです。M・ルターは『キリスト者の自由』という小著で「キリスト者は、すべての者に仕える完全な下僕である」と同時に「キリスト者は何ものにも隷属しない自由な主人である」というテーゼを示し、これは矛盾しないと言います。私達も自らの自由な行為としてmastery for Serviceの人になりたいものです。

（神学部教授・学部長）